

するとペトロが、「たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」と言った。イエスは言われた。「よく言うておく。今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう。」（マルコ福音書14章29節～30節）

しかし、ペトロは、呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が二度目に鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出して、泣き崩れた。（マルコ福音書14章71節～72節）

主イエスと弟子たちは、出エジプトをした先祖の苦難と栄光を記念し、過越の食事をした。食事が終わって、一同は賛美の歌を歌いながら、オリーブ山に向かった。主イエスは弟子たちの裏切りと十字架の死を思い巡らしていた。一方の弟子たちは過越の食事に満腹し、満ち足りた思いで歩いていただろう。月の光が差し込むオリーブの山道で、主イエスは突然、言われた。「あなたがたは皆、私につまずく。『私は羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる』と書いてあるからだ。しかし、私が復活した後、あなたがたより先にガリラヤに行く」と、弟子たちの離反と復活を予告された。弟子たちは、つまずき、離反するという言葉に驚愕するとともに、大きな不満を持った。ペトロが例によって真っ先に、たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」と言い張った。主イエスは「よく言うておく。今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう」と言われた。すると、ペトロは語気を強めて、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と応じた。彼は、信頼し、愛し、従っている自分を理解してくれないことに怒りさえ覚えて、答えている。彼の主イエスへの信従の決意は真実であった。他の弟子たちも、ペトロと同じ決意であることを表明した。

主イエスはゲツセマネで深刻な祈りを捧げられた後、「私を裏切る者が近づいて来た」と話しておられるうちに、イスカリオテのユダが現れた。神殿側が遣わした神殿の衛士たちや群衆も一緒に来た。ユダが接吻し、主イエスが捕らえられた瞬間、弟子たちは皆、蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。つい先ほどの信従の決意はどこへ消えたのやら、主イエスを見捨てて四散してしまった。衛士たちは主イエスを大祭司の館に連行した。

逃げ去ったペトロは、さすがに、主イエスがどのように扱われるのかを案じ、連行された大祭司の中庭に入り、下役たちに紛れ込んだ。中庭で焚かれていたたき火の光にペトロの顔が照らし出された。召し使いの女がまじまじと見て、「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と言った。ペトロは、「何を言っているのか、分からない。見当もつかない」と打ち消した。庭口の方に移動すると、鶏が鳴いた。再び召し使いの女が、「この人は、あの人たちの仲間です」と、周りの人々に告げた。ペトロは再び打ち消した。しばらくすると、居合わせた人々が、「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と、ガリラヤ人の風貌を指摘された。ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が二度目に鳴いた。彼は、主イエスの「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう」と言われた言葉を思い出し、激しく泣き崩れた。勇敢で律儀なペトロは、愛する主イエスを裏切ったのである。福音書は、弟子たちの無理解と挫折の物語として、描き出している。